



2010年4月21日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

緩和医療と漢方医学

癌研有明病院 消化器内科部長・総合内科部長 星野 恵津夫

(1)がん患者に対する漢方治療のアウトライン

本日から6回のシリーズで、がん患者に対する漢方治療のお話をさせていただきます。

このシリーズ全体の構成は、本日の

第1回は、「がん患者に対する漢方治療のアウトライン」。

続いて、

第2回は、「漢方薬の有害事象と副作用」

第3回は、「がん患者への補剤の使い方」

第4回は、「外科的治療と化学療法との合併症の漢方治療」

第5回は、「放射線治療とホルモン療法との合併症の漢方治療」

第6回は、「漢方治療による、がんとの共存」

以上のような予定となります。

がんに対しては、手術、放射線、抗癌剤による三大治療法が行われ、これらを組み合わせることを「集学的治療」と呼びます。それぞれの治療技術を的確に使い分け、あるいは併用することによって、より完璧な治療が期待できるからです。

しかし、多くの患者さんに、すべての治療が無効になる時が訪れます。一筋縄ではいかない、がんという病の特徴です。西洋医学的アプローチにおいては、医療者も患者も、その時点であきらめざるをえません。

欧米の先進的ながん専門病院の多くに、補完代替医療の診療部門が用意されています。西洋医学的には「万策尽きた」としても、患者さんを絶望の淵に突き落とさないためのさまざまなプログラムが提供され、希望の火を消さないようにしているわけです。

一方わが国では、大学病院やがん基幹病院にもそのような部門は設置されていないため、西洋医学が匙を投げた患者さんは、がん難民となって路頭に迷い、さまざまな怪しげなサプリメントや治療法を求めて右往左往しています。

欧米と異なり、日本では伝統的な漢方医学が、数百年の長い年月にわたり、国民のさまざまなニーズに答えてきました。そして漢方は西洋医学とは異なるしくみで病気を治し、患者の苦痛を除きます。そして実際ががんそのものや、がん治療による副作用に漢方が有効なことが、数多く報告されています。

現在、癌患者さんを対象とする緩和医療の対象は、終末期の患者さんです。しかし実際には、終末期に至るまでの長期間にわたる闘病期間を通じて、癌にともなう症状や、治療による副作用や後遺症によって苦しんでいるの方が圧倒的に多いのです。従来この期間の症状緩和は、真剣には取り上げられてきませんでした。終末期患者さんの緩和ケアと同様に、この時期の症状緩和もたいへん重要です。

西洋医学的に治療法がほぼ確立した病態、たとえば癌性疼痛に対しては、WHOが提唱する「鎮痛薬の3段階ラダーによる治療法」によりほぼ満足できる対処ができますが、「元気がない」「だるい」「食欲がない」「眠れない」といった症状を、西洋医学的治療によっても的確に改善させることは、困難です。

一方漢方医学は、もともと「症状緩和のための医学」として完成された治療システムであり、病気そのものを治すことよりも、患者さんの苦痛を緩和することを治療の最終目標としています。

漢方医学では、たとえ病気が治癒しても、患者さんの苦痛がとれなければ、治療が成功したとは考えません。現代の癌治療の現場でも、癌そのものが治ったかどうかはもちろん重要ですが、それ以上に、癌患者さん自身が満足できる治療がおこなわれたか否かが問われるのです。

ここでは、私が4年前から行っております癌研有明病院「漢方サポート外来」での取り組みを通じて、癌患者さんの症状緩和の実際と漢方治療の有用性について、お話しさせていただきます。

癌に対する手術、化学療法、放射線治療などの西洋医学的治療法は、着実に進歩し、治療成績の向上に貢献してきました。しかし、その一方で侵襲の大きな治療が、患者を苦しめている事例もしばしば経験します。癌の治療においては、癌を攻撃すると同時に、随伴する苦痛を緩和することも、たいへん重要となります。

たとえば、頭頸部癌に対して放射線治療を行うと、多くの患者さんで唾液分泌障害がみられます。唾液が減少すると、構語困難、嚥下困難、多量の飲水による頻尿などさまざまな問題が生じ、多くの患者は抑うつ状態を呈し、元気がなくなります。この場合に副交感神経刺激薬を用いますが、効果が得られないばかりか副作用に苦しむ患者さんが少なくありません。こうした患者に漢方医学の立場から麦門冬湯ベースの治療を行うと、患者の多くは唾液分泌を回復して、元気になります。

また、胃癌や大腸癌などの術後には、消化管運動機能の異常による胃排出障害が起き、あるいは腸閉塞をくり返す患者さんがいます。こうした場合にも、自律神経系の調整機能を有する補中益気湯をベースに、茯苓飲あるいは大建中湯を併用した漢方治療を行うことで、消化管運動異常によるトラブルを克服できます。

漢方治療の大きな利点はこうした個別の症状の改善にあります。強調したいことは、漢方薬は精神神経、免疫、内分泌など、身体システムの中枢にも作用して効果を発揮するため、個別症状を緩和すると同時に、食欲、睡眠、排便、排尿、冷え、（女性の）生理などといった植物神経の機能が改善し、「苦しい延命」ではなくQOLの高い「価値ある延命」が可能になる点にあります。

遠隔転移や再発をきたしたがん患者に対しては、抗がん剤や放射線照射による治療が行われますが、その際に患者さんの症状を十分にコントロールしないとすれば、単に苦痛を長引かせるだけの治療となり、非人道的と言わざるを得ません。

同様に、終末期におけるがん性疼痛の緩和は非常に有用ですが、漢方薬をうまく応用して、だるさや食欲不振など、疼痛以外の症状も解決できるなら、患者さんやご家族にとって、残された時間の価値ははるかに高まるにちがいありません。漢方薬により、さまざまな症状が改善すれば、疼痛の閾値が上昇し、医療用麻薬の必要量を減らすことも可能となります。

筆者が2006年に、癌研有明病院という、日本で最も長い歴史があり、現在まで日本の癌医療をリードし続けている病院の中に「漢方サポート外来」を開設した目的は、漢方医学が癌治療の現場で市民権を得られることを、証明することでした。

言いかえますと、癌患者さんの治療に漢方を導入すれば、癌および癌治療に伴うさまざまな症状が改善し、患者さんのQOLが向上し、ひいては延命につながることを示し、癌研有明病院の各科の専門医の先生方に、「癌医療においては漢方が必要である」ことを認識してもらったことでした。

漢方医学には、現代医学がよりどころとする西洋近代医学で不足する部分を補う力があります。すなわち、西洋医学的に治療が困難な病態に直面した時に、漢方医学を導入することによって、治療ができる場合が多いということです。

漢方医学は西洋医学に対しては、コンプリメンタリー、すなわち補完する医学であると位置づけることができます。したがって、現時点における西洋医学と漢方医学の、それぞれがうまく守備できる範囲を見きわめて、患者さんの治療に生かしていくことが重要なのです。

癌研有明病院では、漢方サポート外来の診療を週に2日ほど行っており、1日の患者数は約30人で、そのうち初診患者さんは5-6人います。

患者さんの多くは、院内各科からの紹介ですが、最近では院外から紹介される患者さんも増えています。

患者さんの訴える症状は、全身倦怠感、食欲不振、体重減少、便通異常、夜間頻尿、不眠不安などの全身症状のほか、消化器癌の術後のさまざまな症状、抗癌薬や放射線治療のさまざまな副作用など多彩です。

治療効果は、病気のステージや病態により若干の違いはありますが、多くの患者さんで、めざましい症状の改善が得られます。

癌患者さんは、癌そのもの、および癌の治療によって引き起こされた、さまざまな全身症状および個別症状を呈しています。

その結果、患者さんの気力と体力は失われ、生体防御能、すなわち病気と闘う力は低下しています。私はこのような病態を「癌証」と名付け、癌以外の疾患と区別して、漢方治療を行っています。

癌患者さんの漢方治療にあたっては、オピオイドや抗生物質など、西洋医学的に有効な治療を積極的に用いた上で、「癌証」に対して、いわゆる「補剤」を基本とした漢方処方を行うことがポイントになります。

補剤とは、気力と体力の低下した患者さんを元気にする一群の漢方薬で、生薬として人参・黄耆・当帰・甘草の4生薬と、茯苓・朮など、体内の水の動きをよくする「利水薬」を、構成生薬として含みます。

基本となる補剤は、患者さんの漢方医学的な進行度に応じて、段階的に用いていきます。

第1段階は、癌と告知された患者さんが、不安や抑うつを呈した状態であり、いわゆる“気虚”に最も有効な「補中益気湯」を用います。

第2段階は、癌が進行し、また侵襲的な治療によって気力と体力が低下した状態であり、「十全大補湯」を用います。

第3段階は、さらに病状が進み、少し動いただけでも息切れし、咳や痰を伴うような状態であり、人参養栄湯を用います。

そして最後の第4段階は、全身が衰弱し、動悸、下痢、手足の冷えなどがみられる状態であり、厳密な意味での補剤ではありませんが、体力の極端に低下した患者を元気にする、煎じ薬の「茯苓四逆湯」を用います。

これらの補剤をベースとし、必要に応じて、腹診などの漢方医学的診断に基づいて決定される、患者の体質に応じた漢方薬や、血の巡りをよくする桂枝茯苓丸や当帰芍薬散などの「駆瘀血剤」や、持って生まれた生命エネルギーを回復させる、八味地黄丸や牛車腎気丸などの「補腎剤」を選択して加え、治療法を組み立てていきます（図7）。

今回は癌に対する漢方治療の6回シリーズの初回として、癌の緩和医療における漢方治療について、基本的な考え方を解説しました。

漢方医学は4千年前の古代中国で誕生し、その後長い年月をかけて、中国、韓国、日本のおびただしい数の医師により継承され、発展を続けてきた東アジアの伝統的な治療医学です。このような漢方医学によって、客観性と再現性に優れた現代の西洋医学が苦手な部分を補っていけば、有効性の高い新しい統合医学が生まれると期待されます。